

「日本の自殺」は現実になるのか

本年3月発刊の文藝春秋に、「日本の自殺」の一文が掲載された。同誌1975年3月号に掲載され大反響を呼んだものの再掲である。世界の文明の発生と隆盛の後没落をみたローマやギリシャ等の歴史を振り返り、日本もその轍を踏んでいないかと心配になる。

1975年以前の日本の状況は、東大安田講堂占拠、浅間山荘事件、日本赤軍による航空機ハイジャック事件、外国でのテロ行為が毎日のテレビ、新聞紙上を賑わしていた。経済的には第1次オイルショックによる混乱など社会は不安定な状態が続いていた。その後、バブル期を経て長期に経済の低迷が続いている。資源が少なく、3・11の大災害後、極度のエネルギー不足、少子高齢化による労働力不足から、企業は国内から国外へ活動拠点を移動させている。

社会は物質的豊かさ、便利さは進んだが、自然の中での生活からコンクリートに囲まれた都市での生活、ITネットの急速な発展から、生身の人間同士のかかわり合いが希薄となった。情報が溢れ、処理するのに追われ、ゆっくり物を考える時間もゆとりもなくなり、ただ入ってくる莫大な情報を良悪の判断することなく受け入れる状況となっている。

政治も混乱し、誰が本当に日本のことを真剣に、まじめに考えているのかも判別困難な状態にある。弱い者への虐待も日常茶飯事であり、殺人が起こっても10年も問題化せず見逃される異常時である。加えて昨年以上の大災害になると予想される東南海大地震の発生が現実味を帯びてきている。

額に汗して働くことの大切さを忘れ、義務を尽くさず権利を要求、自分のことのみ考えた醜い政争をし、ローマ滅亡の因となったパンとサーカス政策を続けていて日本が姿を消しはしまいかと心配である。政治、経済は勿論、教育の立て直しが喫緊の課題である。 (北辰)



大通公園を望む窓辺から

自然の力

羅臼の帰り、山はだに裸の木々が多くみられ、今年もまた冬の季節の訪れが近いことを実感させられる。冬には、街路樹がみな、木の幹を風にさらし、本当に枯木ではないのだろうか、生きているのだろうか、と思わざるを得ない風景が続く。寒さと風雪に耐えながら、死んだように極寒の季節を乗り切り、また来年、枯木に信じられないくらい青々とし、躍動感溢れる葉っぱが芽吹き、その生命力を謳歌させる。この自然の偉大な営みに人の力の及ばない自然の中で、私たちは生きている、生かされているということを実感する。と同時に自然の偉大さを改めて知らされる。

3・11、自然の脅威にさらされたが、予測できない災害と言う人もいるが、自らの責任回避のためにそのような言葉を使うものではない。もっともっと自然の偉大さを噛みしめ、自然災害に対する立場を考えなければならない。予測にも、対策にも限界があるということを前提に、いかに防災対策を考えるのかと、謙虚に立ち向かうことが必要である。原発にしても100%安全ということで対策を考えないのではなく、壊れた時にどうするかということを謙虚に考えなければならない。放射能レベルの高い所へ入って作業をするロボット技術の利用など、壊れたときの対策を考えるフランスと、壊れないとして考えない日本と、持っている知識・技術レベルとしては、多分そんなに変わることはないだろう。しかし、その基本的立ち位置によって大きな差が付いたのだろうと真摯に反省すべきと考えられる。

今、当地でも津波被害を考え、防災計画が練られているが、私たち医師会もその中で、どのように対策を練るか問われている。

朝、フロントガラスは凍り、エンジンをかけ、解けるのを待って病院へ出発する。また、自然の輪廻の中で私たちは生きていく。 (K. S)